

「はなれていても家族」

及川 那奈

「早くしなさい。おそいよ！」するところがおそいわたしに、お姉ちゃんがいつも言います。わたしには、十二才年上のお姉ちゃんがいます。お姉ちゃんは、まるで小さいお母さんのように。「もーうるさいなー」わたしも言い返すので、ついけんかになってしまふこともあります。そんなお姉ちゃんが、大学を卒業して就職が決まつたので、家を出てひとり暮らしをすることになったのです。お姉ちゃんが家を出てからは、今までより家中が静かになりました。テレビの音しか聞こえない時もありました。今までうるさいと思っていたお姉ちゃんの言葉が少し恋しくなつて、さみしく思うことも少なくありません。わたしは心の中に穴があいたような気持ちになりました。そんなある日、お姉ちゃんが久しぶりに帰ってきたお姉ちゃんに走り寄り抱きついてしまいました。するとお姉ちゃんは、「ちょっと暑いからやめて」と言いました。またおられた。と思ったその時、お姉ちゃんはわたしの肩を引きよせて「ぎゅー」としてくれたのです。わたしは顔面の力がぬけたみたいに笑顔になりました。そして、ちょっとなみだ目になりながら、そっとお姉ちゃんの右うでにしがみつきました。どんなにはなれていても家族。言葉がなくとも心が通じ合つてるね。やっぱり家族ついいな。